

奈良県におけるバルイベントの地域的特性

石 原 肇[†]

Regional Characteristics of Bar Events in Nara Prefecture

ISHIHARA Hajime

要 旨

日本において、人口減少に伴う都市の縮退は、今後の都市を維持していく上で喫緊の課題となっている。都市の縮退を考えていく上で中心市街地の活性化は大きな課題といえ、その方策の一つとして、バルイベントが注目されている。本稿では、バルイベントの地域的特性の把握および都市の規模とバルイベントの継続性の関係に着目し、奈良県の各市において開催されたバルイベントを研究対象として、都市の規模、開催の状況と継続性、ガイドマップの特徴等、それぞれの地域的特性を明らかにすることを目的とした。奈良県では、奈良市、生駒市、天理市、大和郡山市、橿原市、王寺町の5市1町でバルイベントの開催があったことを確認した。バルイベントは、地域によって多様化していることが明らかとなり、特に以下の2点は注目される。大和郡山市の郡山筒井バルは、他の5か所のバルイベントと比較して実施箇所と運営組織の点で大きく異なっている。運営方法の点で見ると、橿原市の古代大和飛鳥バルは、広域でまちゼミを連動させ同時にかつ長期に開催していることが他の5か所と比較して大きく異なっている。

キーワード：バルイベント， 地域的特性， 奈良県

Keywords: Bar events, regional characteristics, Nara prefecture

[†]大阪産業大学 デザイン工学部 教授

草 稿 提 出 日 3月7日

最 終 原 稿 提 出 日 3月7日

1 はじめに

日本において、人口減少に伴う都市の縮退は、今後の都市を維持していく上で喫緊の課題となっている。都市の縮退を考えていく上で中心市街地の活性化は大きな課題といえよう。戸所(2002)は、コンパクトな都市づくりによる中心市街地の活性化策の必要性を唱えている。近年、中心市街地の活性化策として、100円商店街、バルイベント、まちゼミが注目されている(例えば、長坂他2012)。この中でバルイベントは、2004年の「函館西部地区バル街」での開催に始まり、この開催を端緒として、2009年に千葉県柏市や兵庫県伊丹市で開催され、その後、全国各地での開催が飛躍的に増加してきている。小長谷(2012)は、地域活性化を検討する上で地域商業の重要性を説くとともに、成功事例の分析が必要であることを指摘している。

商学や建築学での先行研究はあるものの、地理学的な視点でのバルイベントに関する先行研究がみられないことから、石原(2016a)は、兵庫県伊丹市の「伊丹まちなかバル」の取組みを対象として、開催する上で必要不可欠な要素としてのガイドマップに着目し、その変遷を把握し、参加者にとって使いやすく、かつ参加店舗の提供内容がわかりやすいガイドマップへと改善が続けられていることを明らかにしている。また、石原(2016b)は、伊丹市が主催する「近畿バルサミット」(第11回)への参加16団体のうち、会議資料として配布されたガイドマップ等10点(滋賀県2点、大阪府3点、伊丹市を含む兵庫県5点)を比較し、多様性が確認される一方で、類似している場合が多いことを確認している。さらに、石原(2016c)では、「近畿バルサミット」に参加する団体の分布状況と、認定された中心市街地活性化基本計画の有無を把握している。

これらの基礎的な調査結果から、バルイベントは継続的に実施されることが重要であるとの認識の下、①近畿地方の府県別のバルイベントの地域的特性の把握および都市の規模とバルイベントの継続性の関係、②中心市街地活性化基本計画の区域設定とバルイベントの実施範囲との整合性、③バルイベントへの地産地消の取組み等による差別化の視点からの分析が必要であろう。このうち、①近畿地方の府県別のバルイベントの地域的特性の把握および都市の規模とバルイベントの継続性の関係については、石原(2017b)が、滋賀県では中心市街地活性化基本計画策定市が4市と、近畿圏の中で兵庫県に次いで2番目に多く、中心市街地の活性化が課題となっている市が多いことから、同県の各市において開催されたバルイベントに着目し、都市の規模、開催の状況と継続性、ガイドマップの特徴等、それぞれの地域的特性を明らかにしている。また、②中心市街地活性化基本計画の区域設定とバルイベントの実施範囲との整合性については、石原(2017a)が、近畿圏の中心市街地活性化基本計画策定市を研究対象として、バルイベントの開催の有無とバルイベン

トの実施範囲の把握をしている。さらに、③バルイベントへの地産地消の取組み等による差別化については、石原 (2017d) では大阪府八尾市の「八尾バル」を、石原 (2017c) では大阪府堺市の「ガシバル」を、研究対象として、取組み状況の把握を行っている。

ここで、奈良県におけるバルイベントに関する先行研究をみると、清水・中山 (2014, 2015) は、奈良市の「あるくん奈良まちなかバル」を対象に調査を行い、バルイベントにきた客による飲食店の評価を参加飲食店に知らせることの重要性を指摘している。また、藤原・中山 (2015) による生駒市の「いまこいバル」に関する商店街活性化の観点からの報告がみられる。このように、奈良県におけるバルイベントに関する先行研究は、建築学の分野で個別のバルイベントに関して、商店街活性化の観点からアプローチがなされている。

そこで、本稿では、奈良県の各市において開催されたバルイベントを研究対象とし、都市の規模、開催の状況と継続性、ガイドマップの特徴等、それぞれの地域的特性を明らかにすることを目的とする。

2 研究対象地域および研究方法

本稿の研究対象地域は、奈良県とする。バルイベントに関する統計がないことから、伊丹市主催の「近畿バルサミット」に参加した団体を把握するとともに、奈良県商店街振興組合連合会主催の奈良県商店街「賑わい事業」交流会「バルサミット」に出席し、開催情報を収集した。その結果、奈良市、生駒市、天理市、大和郡山市、橿原市、王寺町の5市1町でバルイベントの開催があったことを確認した(図1)。

これら5市1町で主催者となっている実行委員会、商工会議所、商店街振興会に資料提供を依頼し、提供可能な資料を入手した。また、2016年7月に奈良市、2016年10月に生駒市、2016年11月に天理市、2017年3月に大和郡山市と王寺町において、バルイベント開催時の状況を現地で行った。さらに、各市の人口(2014年1月1日現在)や駅一日乗降客数(2013年度)等の基本的な統計を奈良県の公表資料より入手した。こうして入手した統計や資料について開催状況やガイドマップ等を比較することで、本研究の目的とする奈良県の各市町において開催され

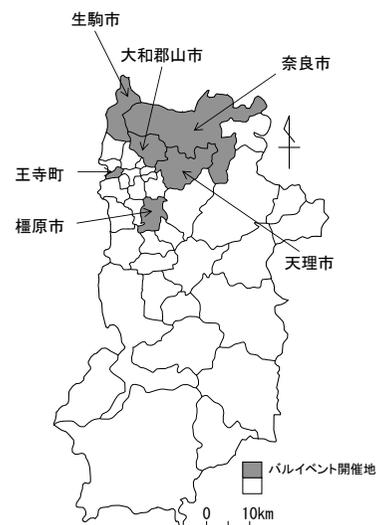


図1 研究対象地域

たバルイベントの地域的特性を明らかにする。

3 直近の開催状況

(1) あるくん奈良まちなかバル(奈良市)

奈良市は、人口360,439人の奈良県の県庁所在地である。バルイベントが開催されたエリアのJRの奈良駅の一日乗降者数は17,486人、近鉄奈良駅の一日乗降者数は30,984人となっている(表1)。JRの奈良駅は、関西本線(大和路線)、桜井線の駅であるとともに、奈良線、学研都市線の乗り入れ駅でもあり、結節点となっている。近鉄奈良駅は、近鉄奈良線の終点駅となっており、大阪府の難波駅や京都府の京都駅から特急が乗り入れている。奈良市は2008年に中心市街地活性化基本計画が認定されている奈良県内で唯一の策定市である。中心市街地活性化基本計画による中心市街地の区域は、289haが設定されている。

あるくん奈良まちなかバルの実施主体は実行委員会、事務局は(株)まちづくり奈良(中心市街地活性化協議会)が担っている。2010年10月に第1回が開催され、2016年11月に第12回が開催されている(表2)。バルイベントの範囲は、中心市街地活性化基本計画による中心市街地の区域としている。第12回の参加店舗数は、飲食が56店舗、物販等が10店舗の合計66店舗であった(表3)。チケットは、5枚綴りで、前売り3,500円、当日4,000円となっている。第12回のチケット販売数は1,238冊であった。枚数にすると、6,190枚となる。バルイベント開催日より後に余ったチケットを使用できる期間(以下、「あとバル期間」という)は、10日となっている。

表1 人口・駅一日平均旅客乗車人員および中心市街地活性化基本計画の有無

都市名	人口(人)	JR線		近鉄線		中活計画の有無
		一日平均旅客乗車人員(人)	駅名	一日平均旅客乗車人員(人)	駅名	
奈良市	360,439	17,486	奈良	30,984	近鉄奈良	有
生駒市	118,297	—	—	22,232	生駒	無
天理市	67,437	2,685	天理	6,802	天理	無
大和郡山市	87,180	—	—	4,019	筒井	無
橿原市	124,126	438	畝傍	18,247	大和八木	無
王寺町	23,050	24,217	王寺	5,180 4,119	王寺 新王寺	無

資料：奈良県統計(2015)および内閣府HPより筆者作成

表2 バルイベントの実施主体・開催状況等

都市名	実施主体	事務局	開催回数	最初の開催年月	直近の開催年月 (期間)
奈良市	実行委員会	嵯まちづくり奈良	12	2010年10月	2016年11月 (2日)
生駒市	実行委員会	生駒商工会議所	6	2013年3月	2016年11月 (2日)
天理市	実行委員会	実行委員会	5	2014年11月	2016年11月 (2日)
大和郡山市	実行委員会 (商店街振興会)	実行委員会 (商店街振興会)	3	2015年3月	2017年3月 (2日)
橿原市	橿原商工会議所	橿原商工会議所	1	2016年12月	2016年12月 (24日)
王寺町	王寺町商工会	王寺町商工会	1	2017年3月	2017年3月 (2日)

資料：各事務局から提供された資料・情報により筆者作成

表3 直近のバルイベントの実施状況

都市名	チケット 繰り枚数	前売り 料金	当日 料金	直近の チケット販売数	直近の 参加店舗数
奈良市	5	3,500	4,000	1,238	66
生駒市	5	3,000	3,500	1,199	51
天理市	5	3,000	3,500	1,050	44
大和郡山市	5	3,000	3,500	950	30
橿原市	各店舗が個別に設定			非回答	49
王寺町	5	3,000	3,500	1,266	44

資料：各事務局から提供された資料・情報により筆者作成

ガイドマップの仕様は、たて366mm×よこ516mmの両面印刷した用紙を3回折りたたみ、たて274mm×よこ129mmにしたものである(図2)。このうちマップは1枚で、その大きさはたて343mm×よこ374mmで、方位の記載はあり、縮尺の記載はなく、地域内の駅は記載されている(表4)。

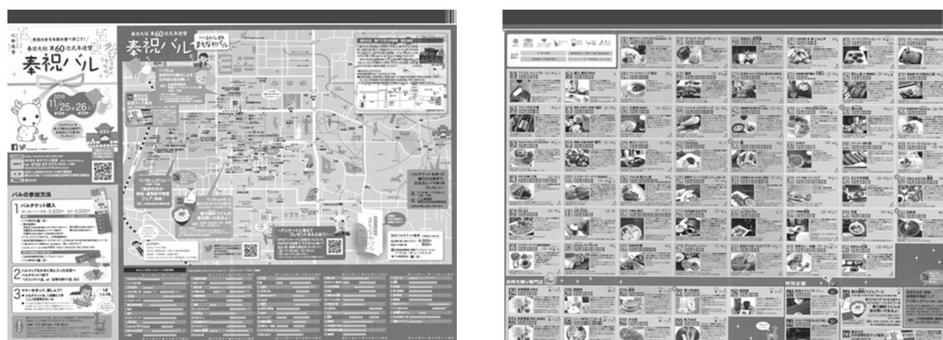


図2 あるくん奈良まちなかバルのガイドマップ

資料：あるくん奈良まちなかバル実行委員会（2017年3月，実行委員会から入手）

表4 直近のバルイベントのガイドマップの仕様

都市名	体裁	サイズ	マップ				
			点数	サイズ	方位	縮尺	駅
奈良市	折りたたみ	たて 366mm×よこ 516mm を 3回折りたたみ、 たて 183mm×よこ 129mm	1	たて 274mm× よこ 374mm	あり	なし	あり
生駒市	折りたたみ	たて 366mm×よこ 516mm を 3回折りたたみ、 たて 183mm×よこ 129mm	1	たて 201mm× よこ 374mm	あり	なし	あり
天理市	折りたたみ	A2(たて 420mm×よこ 592mm)を 3回折りたたみ、 A5(たて 210mm×よこ 148mm)	2	B4(たて 257mm× よこ 364mm)	あり	なし	あり
				たて 206mm× よこ 216mm	あり	なし	なし
大和郡山市	ブック	たて 183mm×よこ 129mm 16 ページ	1	たて 183mm× よこ 258mm	あり	なし	あり
橿原市	折りたたみ	たて 384mm×よこ 546mm を 2回折りたたみ、 たて 192mm×よこ 273mm	1	たて 234mm× よこ 170mm	なし	なし	あり
王寺町	折りたたみ	たて 366mm×よこ 516mm を 3回折りたたみ、 たて 183mm×よこ 129mm	1	たて 196mm× よこ 374mm	あり	なし	あり

資料：現地調査の際に入手したあるいは各事務局から提供されたガイドマップにより筆者作成

(2) いまこいバル (生駒市)

生駒市の人口は118,297人である。バルイベントが開催されたエリアの近鉄線の生駒駅

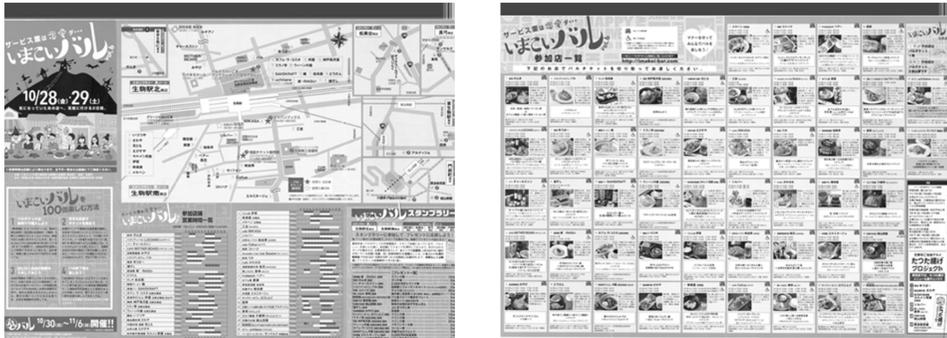


図3 いまこいバルのガイドマップ

資料：いまこいバル実行委員会 (2016年10月, 現地調査により入手)

の一日乗降者数は22,232人で本研究対象地域5市1町の近鉄線の駅の中では近鉄奈良駅に次いで多くなっている。生駒駅は、近鉄の奈良線、生駒線、けいはんな線の3線が乗り入れる結節点となっている。

いまこいバルの実施主体は実行委員会、事務局は生駒商工会議所である。2013年3月に第1回が開催され、2016年11月に第6回が開催されている。第6回の参加店舗数は51店舗であった。チケットは、5枚綴りで、前売り3,000円、当日3,500円となっている。第6回のチケット販売数は1,199枚であった。あとバル期間は、7日となっている。

ガイドマップの仕様は、たて366mm×よこ516mmの両面印刷した用紙を3回折りたたみ、たて183mm×よこ129mmにしたものである(図3)。このうちマップは1枚で、その大きさはたて201mm×よこ374mmで、方位の記載はあり、縮尺の記載はないが、地域内の駅は記載されている。

(3) てんりなバル (天理市)

天理市の人口は67,437人である。バルイベントが開催されたエリアは、JRの天理駅(桜井線)と近鉄の天理駅(近鉄天理線)周辺である。JRの天理駅の一日乗降者数は2,685人と近鉄の天理駅のそれは6,802人となっている。JR桜井線の天理駅と近鉄天理線の天理駅は近接しており、結節点となっているが、両駅を合わせても一日乗降者数は、本稿の研究対象地域としている5市1町の所在駅の中で2番目に少ない。

てんりなバルの実施主体および事務局は、いずれも実行委員会である。2014年11月に第1回が開催され、2016年11月に第5回が開催されている。第5回の参加店舗数は、44店舗であった。チケットは、5枚綴りで、前売り3,000円、当日3,500円となっている。第5回のチケット販売数は1,050冊であった。枚数にすると、5,250枚となる。あとバル期間は、



図4 てりなバルのガイドマップ

資料：てりなバル実行委員会（2016年11月，現地調査により入手）

7日となっている。

ガイドマップの仕様は、A2（たて420mm×よこ592mm）の両面印刷した用紙を3回折りたたみ、A5（たて210mm×よこ148mm）にしたものである（図4）。このうちマップは2枚で、その大きさはB4（たて257mm×よこ364mm）とたて206mm×よこ216mmで、いずれも方位の記載はあり、縮尺の記載はない。地域内の駅は、前者には記載されているが、後者に記載はない。

（4）郡山筒井バル（大和郡山市）

大和郡山市の人口は87,180人である。バルイベントが開催されたエリアは、近鉄樫原線の筒井駅周辺である。筒井駅は各駅停車しか停まらない駅で一日乗降者数は4,019人となっている。一日乗降者数は、本稿の研究対象地域としている5市1町の表1に記した所在駅で近鉄線の駅の中では最も少ない。

郡山筒井バルの実施主体および事務局は、いずれも実行委員会であり、その中核は商店街振興会（筒井プラザ商店街会）が担っている。2015年3月に第1回が開催され、2017年3月に第3回が開催されている。第3回の参加店舗数は、飲食が25店舗、物販等が5店舗の合計30店舗であった。チケットは、5枚綴りで、前売り3,000円、当日3,500円となっている。第3回のチケット販売数は950冊であった。枚数にすると、4,750枚となる。あとバル期間は、8日となっている。

ガイドマップの仕様は、たて183mm×よこ129mmの16ページからなるブック式である（図5）。このうちマップは1枚で、その大きさはたて183mm×よこ258mmで、方位の記載はあり、縮尺の記載はなく、地域内の駅は記載されている。



図5 郡山筒井バルのガイドマップブック

資料：郡山筒井バル実行委員会 (2017年3月，現地調査により入手)

(5) 古代大和飛鳥バル (橿原市)

橿原市の人口は66,810人である。バルイベントが開催されたエリアは、橿原市全域に及ぶ。乗降客数が最も多いのは、近鉄の大和八木駅で一日乗降者数は18,247人となっている。近鉄の大和八木駅は、近鉄大阪線と近鉄橿原線の乗換駅で結節点となっている。また、参考までにJR桜井線の畝傍駅の一日乗降者数を示すと438人となっている。

古代大和飛鳥バルの実施主体および事務局は、いずれも橿原商工会議所である。2016年12月に第1回が開催されている。第1回の参加店舗数は、49店舗であった。古代大和飛鳥バルはチケット制ではなく、参加店舗が個々にバルメニューの価格設定をしている。古代大和飛鳥バルの特徴としては、まちゼミと同時開催している。あとバル期間は、設定されていない。

ガイドマップの仕様は、たて384mm×よこ546mmの両面印刷した用紙を2回折りたたみ、たて192mm×よこ273mmにしたものである(図6)。このうちマップは1枚で、その大きさはたて192mm×よこ273mmで、方位と縮尺の記載はなく、地域内の駅は記載されている。

橿原市は商工会議所の主導で行われている。開催方法はまちゼミ(図7)とバルイベントを同時開催し、バルイベントの期間を24日間としている。市域ほぼ全域をバルイベントの地域としている。奈良県で唯一、チケット制ではなく、参加店舗が個別に料金設定している。運営方法に様々な工夫がみられる。第2回を実施する方向で検討されている。なお、名称をバルとするかも検討がなされている。



図6 古代大和飛鳥バルのガイドマップ

資料：橿原商工会議所（2017年2月，橿原商工会議所から入手）



図7 かしはらふれあいゼミナールのガイドマップ

資料：橿原商工会議所（2017年2月，橿原商工会議所から入手）

(6) 王寺まち歩きバル（王寺町）

王寺町の人口は23,050人である。バルイベントが開催されたエリアは、JR線の王寺駅および近鉄線の王寺駅、新王寺駅の周辺である。JR線の王寺駅は関西本線と和歌山線の駅であり、一日乗降者数は24,217人、近鉄生駒線の王寺駅のそれは5,180人、隣接する近鉄田原本線の新王寺駅のそれは4,119人となっている。本研究対象地域5市1町の中でJR線と近鉄線の駅の合計でみた場合、奈良市に次いで多くなっている。

王寺まち歩きバルの実施主体および事務局は、いずれも王寺町商工会である。2017年3月に第1回が開催されている。第1回の参加店舗数は、44店舗であった。チケットは、5枚綴りで、前売り3,000円、当日3,500円となっている。第1回のチケット販売数は1,266冊であった。枚数にすると、6,330枚となる。あとバル期間は、8日となっている。

ガイドマップの仕様は、たて366mm×よこ516mmの両面印刷した用紙を3回折りたた



図8 王寺まち歩きバルのガイドマップ

資料：王寺町商工会・王寺町商工会青年部（2017年3月，現地調査により入手）

み，たて183mm×よこ129mmにしたものである（図8）。このうちマップは1枚で，その大きさは2枚ともたて196mm×よこ374mmで，方位の記載はあり，縮尺の記載はなく，地域内の駅は記載されている。

王寺町は，商工会主体で標準的な開催方法で行っている。第1回を成功させたことで，第2回の開催を計画するとのことである。

4 継続開催した地域の推移

研究対象の5市1町のうち，これまで3回以上開催し，その状況に関する情報の提供があった奈良市，生駒市，天理市，大和郡山市の4市について，参加店舗数およびチケット販売枚数の推移をみよう（図9）。

奈良市は中心市街地活性化基本計画策定市であり，奈良県内で最も早くから取組みが行われてきている。開催方法は標準的である。料金設定は他と比べ，最も高い。バルイベントの実施範囲は中心市街地活性化基本計画の計画区域と一致させており，広域であるため，参加店舗の密度が低くなっている。参加者の回遊性を高めるため，工夫がなされている。参加店舗数は，おおむね70店前後で推移している。チケット販売数は，第6回をピークにやや減少傾向にある。

つぎに，生駒市は市長の意向で商工会議所が前面に出て実施してきている。開催方法は標準的である。参加店舗も積極的であり，着実に継続開催されてきている。しかし，参加店舗数は，第3回をピークに減少傾向である。チケット販売数は，第2回をピークに第3回は減少したが，第4回にやや増加し，以降はおおむねそれを維持している。

つぎに，天理市は，実行委員会方式で事務局も実行委員会で，標準的な開催方法で行っている。2017年6月に第6回の開催が予定されていたが，第1回の参加店舗やチケット販

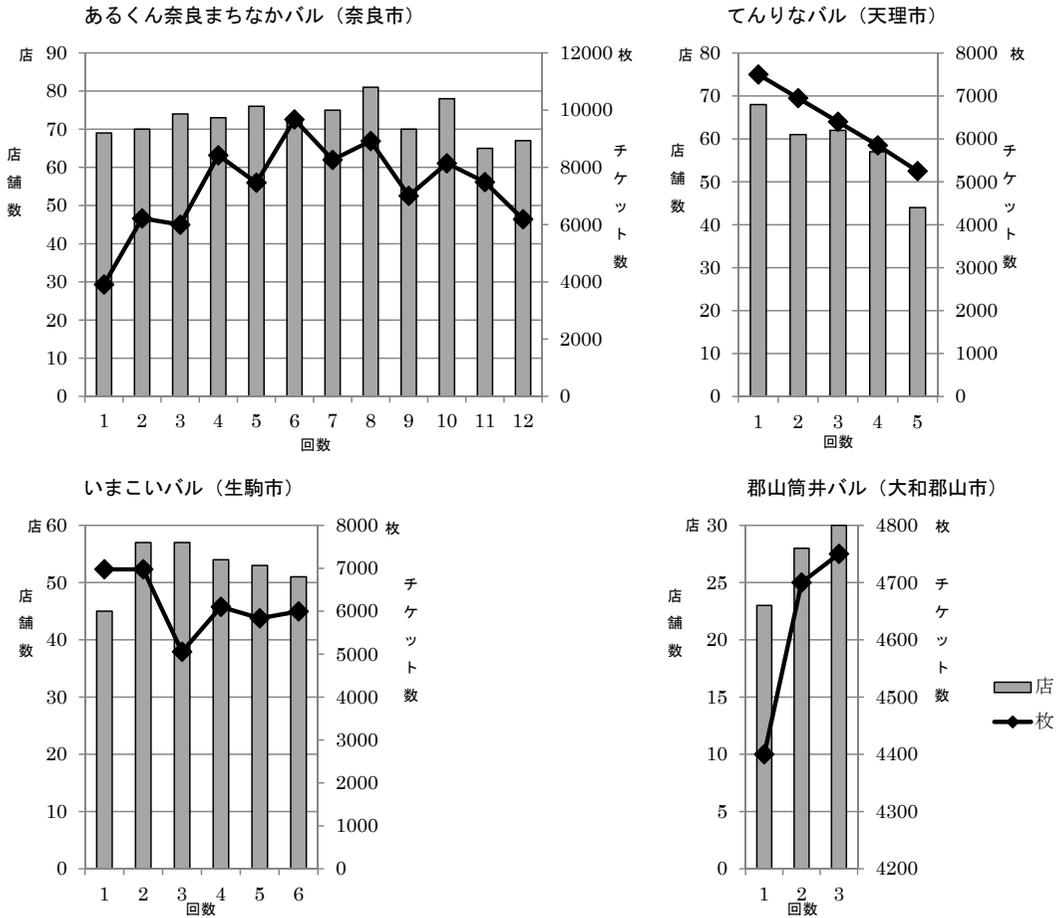


図9 参加店舗数および販売チケット数の推移

資料：各事務局より提供された販売チケット数およびガイドマップから筆者作成
 (てんりなバルの2～4回の販売チケット数は事務局からの情報による推計値)

売数と比べ減少傾向が続き、開催を当面の間は延期、再考することとしている。

つぎに、大和郡山市は商店街振興会が実行委員会の核となっている。標準的な開催方法で行っている。バルイベント開催の動機が、バルイベントの開催ではなく、商店街振興会の役員の若返りにあり、参加している店舗も前向きである。商店街の会員だけでなく、近隣の飲食店も参加費を支払って参加している。第1回の参加店舗やチケット販売数と比べ、回を追うごとに増加傾向にある。

5 まとめと今後の課題

奈良県内のバルイベントは、地域によって多様化していることが明らかとなった。特に

以下の2点は注目される。

第1に、大和郡山市の郡山筒井バルは、他の5か所のバルイベントと比較して実施範囲と運営組織の点で大きく異なっている。実施箇所については、他の5か所が複数の鉄道路線の結節点となる駅が実施範囲に含まれるが、郡山筒井バルは1路線の各駅停車しか停まらない駅の周辺である。運営組織は、実行委員会方式であるが、その主体は商店街振興会となっている。他の5か所と比べて、乗降客数が比較的少ないにも関わらず、参加店舗やチケット販売数は増加傾向にあることから、運営方法によって継続した実施が可能であることを示唆している。

第2に、橿原市の古代大和飛鳥バルは、運営方法の点でみると、実施範囲が広域で、かつ、まちゼミと連動する形で、同時期に長期に開催していることが他の5か所と比較して大きく異なっている。バルイベントは1～3日程度の開催がほとんどである中、極めて長い開催である。また、まちゼミと連動する形で市域全域を対象とする実施範囲という点でも極めて特徴的である。従来のバルイベントの実施方法を越えた運営方法による地域活性化策として注視すべきであろう。

今後は、兵庫県や大阪府についても、同様の視点からバルイベントの地域的特性を把握し、地域に応じたバルイベントのあり方を検討していく必要がある。

謝辞

本稿は、2017年度近畿都市学会春季大会（奈良教育大学）で口頭発表した内容を修正・加筆したものである。本研究を進めるにあたり、オフィスはなはなの堀登志子氏にご助言いただいた。また、奈良県商店街振興組合連合会事務局の新堂順規理事には平成28年度奈良県商店街「賑わい事業」交流会「バルサミット」への参加をお認めいただいた。また、各市町の商工会議所等の関係機関からガイドマップやチケット販売数等の情報の提供をいただいた。ご協力いただいた方々に謝意を表す。

参考文献

- 石原 肇「伊丹まちなかバルにみるガイドマップの変遷」『地域活性学会第8回大会論文集』、2016年9月、355-358ページ。
- 石原 肇「「近畿バルサミット」に参加する団体のガイドマップの類似性と多様性」『日本地理学会学術大会要旨集』第90号、2016年10月、155ページ。
- 石原 肇「伊丹市主催「近畿バルサミット」の参加団体からみたバルイベント開催の波及状況」『地域活性学会第5回関西支部研究会』、2016年11月、配布要旨。

石原 肇「バルイベントの実施範囲と中心市街地活性化基本計画の区域設定との整合性－近畿2府4県を事例として－」『日本地理学会学術大会要旨集』第91号, 2017年3月, 177ページ。

石原 肇「滋賀県におけるバルイベントの地域的特性」『日本都市学会年報』第50巻, 2017年5月, 241-250ページ。

石原 肇「大阪府堺市の「ガシバル」における地産地消の取組」『地域活性学会第9回大会論文集』, 2017年9月, 242-245ページ。

石原 肇「大阪府の「八尾バル」における地域特産野菜を用いた地産地消の取組み」『地域研究』第58巻A, 2017年12月, 28-40ページ。

小長谷一之「地域活性化を考える視点」, 小長谷一之他『地域活性化戦略』, 晃洋書房, 2012年3月, 1-57ページ。

清水裕子・中山 徹「継続的な商店街活性化イベントのありかたに関する研究：あるくん奈良まちなかバルを事例として」『日本建築学会技術報告集』第20巻第44号, 2014年2月, 285-290ページ。

清水裕子・中山 徹「商店街活性化イベントのインターナル・ブランディングに関する研究:あるくん奈良まちなかバルを事例として(その2)」『日本建築学会技術報告集』第21巻第49号, 2015年10月, 1229-1234ページ。

戸所 隆「コンパクトな都市づくりによる都心再活性化政策」『季刊中国総研』第6巻第1号, 2002年3月, 1-10ページ。

内閣府地方創生推進事務局「認定された中心市街地活性化基本計画」

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/chukatu/list.html> (2016年9月8日閲覧)

長坂泰之・齋藤一成・綾野昌幸・松井洋一郎・石上 僚・尾崎弘和『100円商店街・バル・まちゼミ お店が儲かるまちづくり』学芸出版社, 2012年12月。

藤原ひとみ・中山 徹「商店街活性化事業に関する研究：「いまこいバル」を事例として」『日本建築学会学術講演梗概集 2015 (都市計画)』, 2015年9月, 69-70ページ。